

7 『正法眼蔵』の思想

【全2回】／開催方法：対面併用

より ずみ みつ こ
頼住光子

駒澤大学仏教学部教授
東京大学名誉教授



受講料 会員料金：¥5,000 早割価格：¥4,000(納入期限：7月28日)

【日程・時間】【全2回】

8月4日(火) 12:30~14:00/14:10~15:40

■受講に必要なもの

[テキスト] レジュメ配布

近年、世界的に禅への関心が高まっています。その背景には、先行きの見えない現代社会において、人々が不安や閉塞感を抱え、心の拠り所を求めているという状況があります。経済的効率や利益の最大化を最優先とする価値観に対する疑問が広がる中で、そうした価値観を相対化し、別の生のあり方を示す思想として、禅は重要な示唆を与えています。

禅は、約二五〇〇年前の釈尊の開悟成道を根源的出来事（原事実）とし、釈尊から摩訶迦葉へと伝えられた法の継承を自らの起源としてきました。インドから中国へと受け継がれたとされるこの系譜は、日本においては鎌倉時代の禅僧・道元によって独自の展開を遂げつつ受け継がれます。道元は、自らの教えがこの仏教の原点に直接連なっていることを強く意識し、その立場から独自の思想を展開しました。

道元の思想の特徴は、仏教の根本に立ち返りつつ、それを徹底して実践し、言葉として表現した点にあります。その思想の集大成が『正法眼蔵』であり、「日本思想史上、最高の哲学書」と評価されています。しかし同時に、『正法眼蔵』はきわめて難解な書としても知られています。その難しさは、私たちが日常的に前提としている主観と客観を分ける主客二元論や、事物を要素に分けて理解する要素還元主義的な思考枠組と、道元の世界理解との間に大きな隔たりがあることに由来します。

道元は『正法眼蔵』において、思想をわかりやすく説明するのではなく、語りのあり方そのものを通して、読者が自明視してきた理解の枠組みを揺さぶり、相対化しようとしています。そのため、一読して理解することは容易ではありませんが、論理の展開を丁寧に追い、表現を一つ一つ読み解いていくことで、道元の示そうとした世界像に徐々に近づくことが可能になります。

本講座では、『正法眼蔵』を手がかりに、道元が何を問い、どのような世界の見方を提示しようとしたのかを、できる限り分かりやすく検討します。道元の思想に触れることを通して、私たち自身が無意識のうちに依拠している価値観や思考の枠組みを問い直す契機とすることを目指します。

【参考書】

『正法眼蔵入門』

著者：頼住光子 出版社：角川ソフィア文庫 出版年：2014